

N o g a t a

2022、11、15

直方ミニバスケットボールクラブだより

共育コラム

「自立」に必要な「自律」の力

コロナ禍の活動について

収束に向かっているかにみえた新型コロナウイルスの感染がまた拡がりはじめました。直方市でも学級閉鎖や学校閉鎖が出ています。気温が下がるとウイルスが活発化するようで、今後の状況を注視しておかなければなりません。引き続き可能な感染対策を行いながら活動していくことになります。

コロナ禍も3年が経過します。この間、感染が確認された後の対応は、かなり変化してきました。その取り扱いは今後さらに変化する可能性があります。

自己判断、自主規制

徐々に判断が私たち個々に委ねられる方向に変化してきました。指示があれば、自ら思考することなく、それに従うしかないと思うわけですが、指示がないとなれば、個々が考え判断するしかありません。ところが私たち（日本の教育をうけた人たち）は、自分で決めることに子どもの頃から慣れてなく苦手な人が多いと言われています。指示をまち指示通り動くことに慣らされている、みんなと同じようにしておかないと不安、人と違うと心配などの気持ちをはたらいてしまいます。

欧米では（欧米がすべていいわけではありませんが）、みんなと違うから価値がある、自分は自分、あなたはあなた、違いはあっても相互に尊重し合うことなどが大切にされています。なので、それぞれがもっている特性も“よさ”として受け入れられています。教室にいる子どもたちは多国籍、多民族が当然で、それを前提に教育が創られていることから生み出されている文化です。

日本人は、「同調性」「協調性」が高い国民として評価されることが多くあります。スポーツの世界でも、「そろえる」「あわせる」などを主とする種目は得意と言われています。その一方で、それが「同調圧力」となって、互いを縛ってしまうことがあります。みんなと同じでなければならない、みんながしているから私もそうしなければならない、みんなが言うから私もそれに従う、などの思考、行動が起きやすいのです。コロナ禍でよく言われたことの一つに、「日本人は法の規制がないのに、みんなマスクしている」

というのがあります。外国人からしたら不思議でならないそうです。これを「日本人の誇り」ととらえる人もいるでしょうし、ただ「同調圧力に縛られている」ととらえる人もいるでしょう。

「個性」「自己主張」と「同調性」「協調性」を相対立するものとせず、双方のよさ、大切さを生かしていきたいですね。

自分で考え判断し行動する力を

公的に規制されていない何らかのことを判断するとき、まわりの動向に目を向けることは必要な場合もありますが、最終的には自分の判断を大事にしていかなければならない時代になってきています。それは「自律」と「自立」の力です。「自律」とは自分の行動を自分の立てた規律に従って正しく規制すること、「自立」とは他に従属することなく自分で物事を行うことです。「自立」は「自律」の力がなければ成り立たないものです。そしてこれは、子どもの頃から大切にされ、鍛えられていかなければ身につけていきません。

子どもによく言います。「ものごとを判断するには、人の話を聴いたり、いろいろな情報をとったりすることはとても大切。それらを参考にして、そのうえで最終的には自分で決めることが大事」と。それは、その判断によって生じる結果は、自分で受けとめるべきだからです。他者に決められたことによって、よい結果を得られたときはいいですが、よくない結果になったときには、「お母さんが、お父さんが、先生が、友だちが…言ったからそうしたのに…」と、結果責任を自分でとることをせず、すべてまわりのせいにして、まわりを恨むことになりがちだからです。

自分で決めたことであれば、うまくいけば自信につながります。うまくいかなかったときは自分をふりかえることになります。もちろん、それがつらいこともあります。そのために自ら受けとめる胆力（気力・精神力）を日常の生活から鍛えておかなければなりません。それでも苦しむときもあります。そのときこそ、まわりのおとなの見守り・励まし・応援が必要なときです。

そのための私たちおとなの立ち振る舞いや言動、かかわりは重要です。何か物事を決める時、他者の意見を参考にしながらも、自分なりの考えをもって自分で決めているかどうか。うまくいかなかったとき、自分の思うようにならなかったとき、まず自分をふりかえて考えているかどうか。私たちおとなが、どのような姿を子どもたちに見せているかが問われます。

おとなの役割

子どもとの日々の生活のなかで「みんなが持ってるから、うちも買って」「みんなしてるから、ぼくもしていいでしょ」「みんなが行くって言うてるから、わたしも行っていいでしょ」など、よくありがちですね。お気づきと思いますが、すべて「みんなが…

だから」で、自分の判断は一切入っていません。このことは学校でもよく話題になります。子どもに「みんなってだれ？」と聞くと、たいてい数名の友だちで、クラス「みんな」ということはまずありません。「みんな」というあいまいな表現に、おとながごまかされているケースがほとんどです。

さらに、「あなた自身はどう思う？」と尋ねると、「ようわからん」と応えることが多いです。「じゃあ考えてみよう」ということになります。「いいと思う」ということもあります。「なぜそう思うの？」と問い返します。たいていの場合、まっとうな理由を示すことはできません。「じゃあ考えてみよう」ということになります。そのうえで、許可できるものであれば許可しますし、そうでなければ許可しません。

時代の変化とともに、苦労の場面や苦労のしかたも変わってきていると思いますが、何かにつけ今もそれなりに大変なのではないかと思います。頭ごなしに「だめ」というのでは納得しないと思いますが、社会生活を体験しているおとなとして、子どもに言い含められないようにしないといけないですね。

良くも悪くも自分がとる行動は必ずまわりに影響することを自覚して

本人が決めたことによって生じる結果責任は、本人がとる。親も同意して決めた（認めた）ことによって生じる結果責任は親もいっしょにとらなければなりません。いずれの場合もよい結果のときはいいですが、よくない結果のとき、それによって生じる影響が心配です。本人だけ、家族のなかだけでとどまっている場合はいいですが、社会生活を営んでいけば、たいていの場合まわりを巻き込むことになります。常日頃からその自覚をもって物事を判断する力を身につけていなければ、責任のとりようがなくなることがあります。

子どもによく言います。「何かに所属をした時点から、自分がとる行動はすべてそこに所属しているみんなに影響する」と。「ここに入部したら、その時点から自分のとる行動は、クラブのみんなに影響する。クラブが大事にしているルールやマナーに反する行動・行為があれば、必ずみんなの活動に影響を及ぼす。だから自分の行動を正さなければ、ここで活動していくことはできない」と。

これは「学級」「学年」「学校」、ひいては「地域」「社会」…というように拡がりをもっても同様のことが言えます。だから、すべての人は社会を形成する一人として、この国のルールやマナーを守って生活を営んでいるということになります。

